

敷地見学のポイント

- 1 車椅子ユーザー視点での周辺歩道や車寄せの整備
- 2 積雪時や降雪時の施設へのアクセス
- 3 主催者と来館者のゾーニングや、興行時を念頭に置いた駐車場計画
- 4 旧総合庁舎の周辺の記憶を継承できるスポットづくり
- 5 多様な活動が内外から見えるような「施設の顔」づくり

新文化ホールの底の色や、積雪期の底の下の状態も含めて考えたい

快適なアクセスのため、新文化ホールと庁舎の底をしっかり連続させたい

新文化ホールができると、市総合庁舎南側の底が暗くなってしまうのでは

興行で行列ができたときにも、施設内や底の下で待機したい

エントランス前にアトリウムをつくることや施設前を大屋根で覆うことも考えられるのではないかな

アトリウムは夏期に暑く、冬期には寒くなることから空調の問題等が、大屋根は冬期に雪の吹き込みや積雪の問題等が想定される

来館者や、可能であればバスなども入れる車寄せがあるとよい

自家用車で送迎時、車椅子ユーザーが近くで待てる場所があるとよい

総合庁舎前庭



旧総合庁舎への斜めの道を引き継ぐことで、旧庁舎の記憶を継承でき、施設の「顔」や建物の「引き」を作ることができるのでは

臨時駐輪場



臨時駐輪場は以前芝生だった

市総合庁舎周辺は以前より緑が少なく、殺風景になった

彫刻「青年像」



市民文化会館前から移設されたガス灯がある

看板・掲示板等

OMO7の1階外壁レンガは過去の建物を模していると言った。そうした過去のものを生かす考え方もあるか

現市民文化会館

ユニークベニューの考えを取り入れ、半屋外の大屋根の下でコンベンションの飲食イベントを開催すると印象に残るだろう

市総合庁舎の底と新文化ホールの間をアーケードのような屋根で覆い、カフェなどを設けることで、人が滞留する空間にできるのでは

両方の施設へアクセスでき、駐車場から見た動線も綺麗になるのでは

底から見える施設内の様子



施設の中の活動が外から見えるのはよい

底から建物へのつながり方や、市総合庁舎との窓の位置の調整も考えたい

ユーザーゾーン

サービスゾーン

一般に、サービス側は裏手になってしまい、顔は完全に見えなくなってしまう

駐車場から来館する人は裏側しか目にしないので、こちらにも顔の要素が見えるよう工夫したい

諸室の在り方にも関係する

敷地の南東の角



印象が薄かった
バックヤードにすることが考えられる

現旭川市民文化会館北側の出窓のように、窓を工夫することで施設内の様子を伝えられるのではないかな

現文化会館北側の出窓



ロードヒーティングが無い歩道は、車椅子と歩行者がすれ違うのがやっと

舗装材が冬季に割れると車椅子が通行しづらいため、割れづらい舗装にしたい

第三庁舎前の傷んだ舗装



押しボタン信号



興行等の前後、押しボタン信号に来館者が多数並ぶと想定される

仮に歩道橋や地下道を整備しても車椅子の方や御年輩の方のことを考えると課題は残る

永柳橋通側のゾーニングを南北で分けることで、主催者と来館者の動線が重ならないようにしたい

現在、街路樹があるように植栽等でサービスゾーン付近も殺風景にならないようにしたい

敷地東側の歩道



S=1:800

0 10 20 50(m)



OMO7 旭川